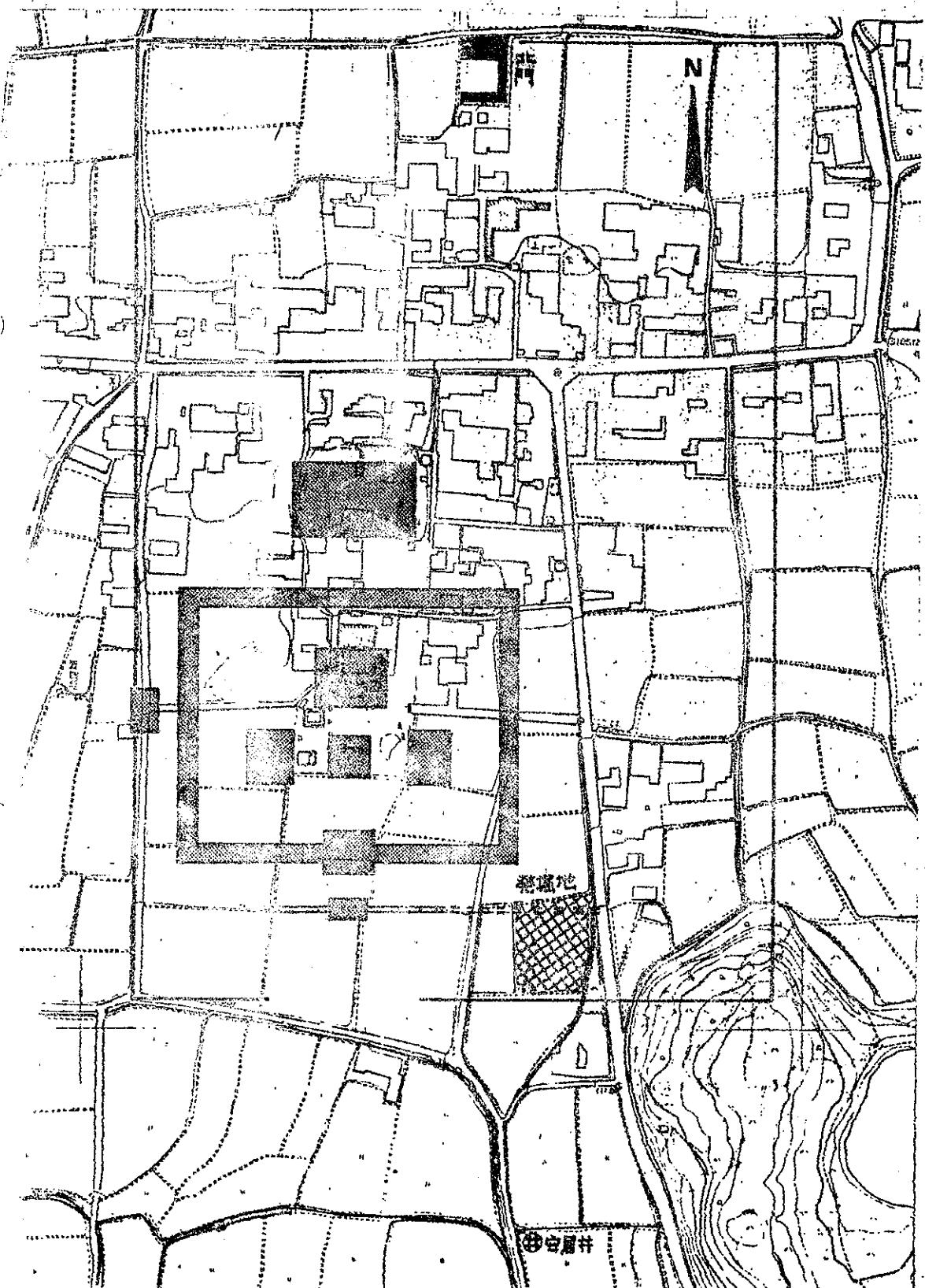


# 飛鳥寺発掘調査現地説明会資料

1979年3月16日 飛鳥藤原宮跡発掘調査部



この調査は史跡飛鳥寺跡の現状変更申請に基づく調査として昭和54年1月10日から行なった。発掘区は、飛鳥寺の東南隅に位置し、南門から東へ伸びる築地部分とその南の区域に位置する。発掘面積は約900m<sup>2</sup>である。検出された主要な遺構は、築地1、掘立柱建物2、塀3、素掘溝6、石組溝2、石列5、木樋1、土塙1である。遺構は重複関係と出土工器から4時期に大別できる。

## I期

斜行石組溝 SD 01は、幅30~50cm、高さ50~70cmの大形の石を縦に1段並べた内径1.2mの溝である。発掘区北半15m分を露呈させたが、南半では縦柱の遺物SB10を保存するため、発掘区南端でその存在を確認するに留めた。

斜行石列 SX 02は、30×30cm~15×20cmの玉石と2列並べ、その西側に高さ30cmの見切石を立てる。南北9mを検出し、北側では土塙状の窪みたところ削平される。

南北石組溝 SD 03は、4~5段に石を積み上げた内径1mの溝である。最下段は70×30、50×50cmの大形の花崗岩を用い、2段以上は40×20、15×10cmのやや小形の花崗岩その他、凝灰岩切石を混在する。溝の埋め土は2層に分れ、北端では下層が西へ屈曲し、東西素掘溝 SD 04に繋がり、上層は東へ屈曲し、東西素掘溝 SD 06に連結する。下層から7世紀前半の土器を出土している。これらSD01・SX02・SD03・SD04は今回発掘中最も古い遺構である。SD01・SD03下層からは瓦を出土17枚。

築地 SA 05の背面玉石列は、飛鳥寺創建当初のものと思われるが後述する。

方位の振れは、SD01・SX02が北で東に10~20°の方向を示し、飛鳥寺南門南方の石敷広場北縁の振れ(7°58'50")と直交する線に類似する。

## II期

掘立柱建物 SB10は、2×2間の縦柱の建物で、柱間は9尺等間である。柱の配置から考えると倉と考えられる。西側には建物を画する如くに玉石列SX11が並ぶ。さらに西北には、盲暗渠状の石の施設SX12が存在する。

柱立柱建物SB13は、3×2間の東西棟の建物である。現状では柱位置に乱れがある。  
mの2枚の大石を並べ、その下を暗渠として通る溝となる。

2

られ、なお検討を要する。

東西堀SA08は築地心より南6mの位置にあり、8尺等間で11間分を検出した。  
斜行石組溝SD01(7世紀前半)より新しく、後述の南北溝SD16上層より古い。

東西堀SA09は築地心より南17.5mの位置にあり、8尺等間で11間分を検出した。  
斜行石組溝SD01・南北石組溝SD03より新しく、後述の南北溝SD17(7世紀  
最終末～8世紀初頭)より古い。

南北堀SA07は、9尺等間で3間分を検出した。柱間寸法が異なるがSA09の柱と  
柱列が揃うので、同時に存在した可能性が強い。

南北素掘溝SD14は幅1m前後の素掘りの溝で、深さは50～70cm。底部は幅25  
cmでさらに1段下がっており、所々に小石が点在する。7世紀前半の土器が出土している。

木桶SX15は南北26m分を検出した。北方ほどやや低くなる。この木桶は幅約  
1mの掘方と掘り、さらに底部を1段掘り、木桶を置いた後に土を粘土で固めている。  
木桶身の1本の長さは6～12mで、外径は16～23cm、内径は10cm前後である。  
断面でみると、外側は逆台形、内側は溝を円形に割り抜く。木桶蓋は厚さ5～10  
cmで溝上部に落込む形式である。

東西溝SD06は、幅1mの素掘りの溝で、南北石組溝SD03-B(上層)と連結す  
る。溝内から7世紀後半の土器を出土した。この東西溝はさらに北へ屈曲し、南北溝  
SD16下層となって、築地の下へとぐる。

### Ⅲ期

南北溝SD17は、幅約1mで南北18m分を検出した。砂とパラスを含む浅い溝で、  
北側は削平されて消失する。7世紀最終末から8世紀初頭にかけての土器を含む。

南北溝SD16-B(上層)は南北溝SD16-A(下層)より幅をせばめ、築地に近接する部  
分では両側に花崗岩の玉石を並べる。この溝は、築地部分では上部に1×1.7m, 1.7×0.75

mの2枚の大石を並べ、その下を暗渠として通る溝となる。  
築地SA05は正面玉石列と背面玉石列とK字形された幅2.5mの部分で、昭和32年  
の南門地区の調査では築地の厚さを約1.5mと復原している。背面玉石列は地盤が低く、  
創建当初の可能性が強いが、先の調査の石敷雨落とは異なっており、なお検討を要する。  
正面玉石列は石列の下に瓦を含み、部分的には焼土を混えており、後に補修したのであ  
る。

### IV期

SK18は、発掘区西北に広がる土塁で、上層から瓦器が出土している。

以下では調査で判明した遺構の性格について説明しておきたい。

① この地域ではまず飛鳥寺伽藍の南限として築地が造られている。この築地は、その後  
改造を受けていて、現状では背面玉石列しか当初のものか残っていない。この築地が造られた  
のは飛鳥寺創建時のことと思われ、そのこうは築地南は空閑地であったようであり、伽藍地内  
への導水路としてSD01などが存在している。

② 第Ⅱ期の遺構として縦柱の建物SB10と柱立柱堀SA08が特記される。飛鳥寺  
の寺域は、東西2町×南北2町を復原されたが、昭和52年の発掘によって寺域は北  
方へのび、南北3町と確認された。この3町は、飛鳥寺南門南方の参道と石敷広場北縁  
の交叉点を起点とするのが最も合理的である。即ち今回発掘した区域は、飛鳥寺寺域内  
にあると考えられる。これは、今回検出の柱立柱堀SA08の振れが東でやや北に振れ、飛鳥  
寺の振れと一致し、飛鳥板蓋宮伝承地の遺構の振れと異なることと合わせて考るに便  
である。

7世紀中葉において、南門から東へ伸びる築地の南で、一本柱の堀(SA08)より空閑地  
が画され、さらにそれを細分するようにSA07・SA09の堀で区画される。この区内に縦柱の  
建物SB10(倉)が建てられ、この倉を中心として溝の流れがSD04からSD06へ変更されたと考

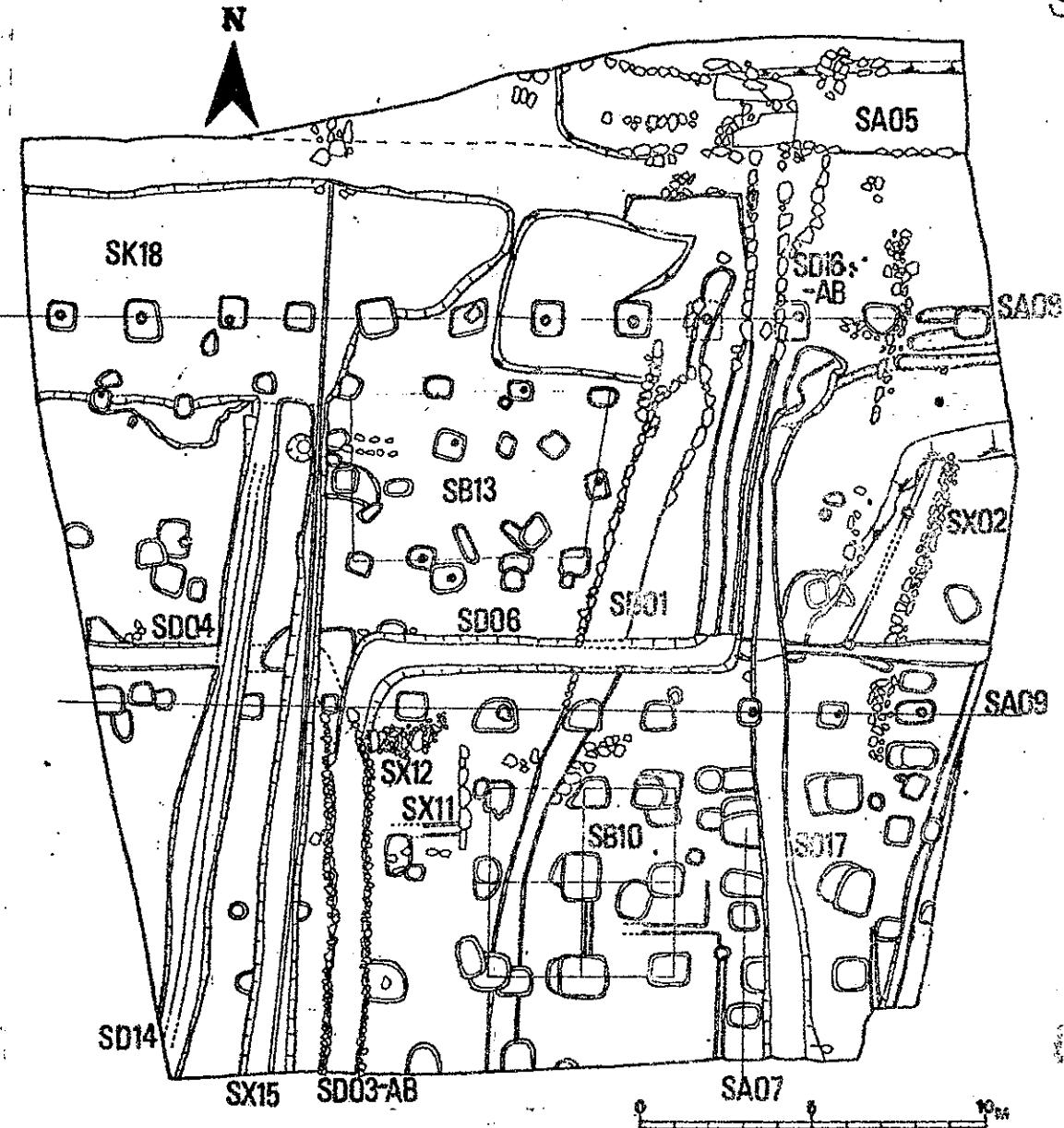
えられる。

ここで想起されるのは『続日本紀』の道昭の禪院、『三代実録』の道昭の禪院寺であり、後者はその創建が「本元興寺東南隅」とおいて「壬戌年」(天智元年)にあると記している。当発掘区は飛鳥寺の寺域の東南にあたると考えられるから、SB10は飛鳥寺東南隅に位置した禪院に關係するものとみなせよう。

③ 次に、今回検出した木樋が注目される。木樋は初めその西側にある南北素掘溝SD14に設置してあったものを東へ置き換えたようである。そして北方へ行くにつれて低くなるので、飛鳥寺へ向って流れる上水施設であることは疑いない。そして、その流路については、今回の発掘区の南方約100mで昭和46年に奈良県教育委員会が発掘した木樋との関連を考えさせる。ただ、この木樋は断面台形の上下2枚組みで構造が異なること、最大幅が45cmあり大形であること、そして方位の振れなどを考慮すると、直ちにこの木樋が今回検出の木樋と連結するとは言えない。近接する『寄居井』(カナヤ井)との関連も併せ考えるべきであろう。

④ 最後に、築地SA05に關連して大型の石2枚使った暗渠の遺構と、その南方の溝との関連が重要である。細部補足調査前であるから確言できないが、7世紀前半の斜行石組溝SD01、7世紀後半の素掘り南北溝SD16-A(下層)、8世紀の石組溝SD16-B(上層)のそれぞれの流入口に築地下の暗渠がなっていると考えられ、当初の位置をほぼ踏襲しながら何度も改修されたものであろう。このような頻繁な改築は、飛鳥寺とその南方域が7世紀において密接な關係であったことを示唆し、飛鳥寺と一緒にものであることを物語るものといえよう。

なお、本調査は今回の現地説明会後実測・細部補足調査を行って、さらに精査を加える予定である。



#### 〈参考史料〉

- 壬戌年(662) 禪院を本元興寺の東南隅に創建する
- 文武4年(700) 道昭、禪院で物化
- 和銅4年(711) 弟子等が奏聞して禪院を平城京に移建する
- 文武4年3月10日条(続日本紀)  
此院ニ經論多々有。書迹階好ニシテ並ニ錯誤アラズ。皆和尚、将来スル者ナリ。